



YAMAGA

近代の山鹿の
偉人たち
シリーズ

020

私財を投じ山鹿温泉を大改築、殖産興業の先駆け

江上津直・井上甚十郎

(一八二七〜一九〇五)

(一八三三〜一九〇六)



江上 津直



井上甚十郎

江上津直と、津直より五歳年下の井上甚十郎は、多感な青年期を横井小楠の塾で学び、実学党の薫陶を受ける。実学とは「実際に役に立つ学問こそが最も大事であり、民の立場にたった政治を行わなければならない」という小楠の進取開明的な考え方で、この思想が二人の一生を決定付けた。

二人は、学舎を設け、児童教育の普及に尽力したほか、製糸や製茶、清酒醸造の改良を行い、山鹿や近隣の地域の殖産興業に努めた。特に私財を投じて山鹿温泉の大改築を行い、熊本県一の温泉場として発展させた。

二人の思想は、そのあと、彼らの息子の江上定雄や井上明四郎に引き継がれ、彼らを中心に本格的な劇場の「八千代座」や「鹿本鉄道」の建設に至った。

生い立ち

江上津直は、幕末の文政十年（一八二七）に父為右衛門、母綱子の間に生まれました。温厚な人柄で、言葉数は少なかったが、一旦、こうと決めたらすぐに実行に移す人でした。井上甚十郎は、津直より五歳年下で、天保四年（一八三三）に生まれ、父を善太郎、母をてるといいました。甚十郎の姉嘉知子は、津直の妻で、甚十郎と津直は義兄弟でした。



横井小楠

甚十郎は文武両道に秀で、幼いときは祖父の井上観山から讀書を、小川周平には習字を教わりました。青年期になると、福田春蔵の塾に入門し、ここで和漢の学を修めます。また、武術においても研鑽を積み、体術や馬術などに励みました。

横井小楠の薫陶を受ける

青年期に受けた教育は一生を左右するといわれますが、二人は多感な青年時代に横井小楠の塾で学び、小楠の思想に傾倒しました。

幕末のころ、世の中はすっかり行き詰って、百姓一揆が頻発していました。そんな中、小楠は孔子、孟子のいう「修身齊家治國

平天下」がどうしたら実現できるのか、農民の困窮を救うためにはどうしたらよいか、『時務策』を書いて、肥後（現在の熊本県）藩政を批判し、「御國中士民の利益になる道」を求めなければならぬと主張します。

これまでの肥後藩政が目指したものは、藩の財政の安定「いかにして藩主の収入を増やすか」であり、民の立場に立った「士民（武士と庶民）の利益になる」政治を提唱した小楠の思想は、これから先の津直と甚十郎に大きな影響を与え、二人の生き方を決定付けました。

山鹿温泉の大改築

幕末の肥後藩には、学校党、勤王党、実学党の三つの学統がありました。学校党は藩校時習館を中心とする肥後藩の主流で保守・佐幕派、勤王党は林校園の流れを汲む攘夷派、実学党は横井小楠を中心とする進取開明的なグループでした。

明治三年（一八七〇）五月、藩知事が細川韶邦から護久に替わると、直ちに首脳人事が断行されました。今までは、学校党が藩政の中枢にいましたが、横井小楠門下の実学党がそれに入れ替わることになりました。

山鹿の町でも実学党の津直と甚十郎が拔擢され、津直は小属に、甚十郎は山鹿の町の里正になりました。

藩知事の護久は、藩の財政を立て直すために率先して、自らの家禄の半分を管内の費用にあてたいと中央政府に願い出て、禄制の改革を行いました。また、藩の機構改革にも着手し、千五百の役職が廃止されました。

地方では手永制度が改められ、郡代・総庄屋・庄屋が廃止され、里正・与長が置かれました。

そんな中、津直と甚十郎は、自分たちも家禄を返還して、身代

限りの献金をし、藩の財政を助けたいと願います。

護久は、その志を褒めたたえたものの、「公益事業に全力を尽くしなさい」と二人を諭し、その願いは却下されます。そのとき、横井小楠門下の内藤泰吉から山鹿温泉大改築の勧めを受け、「自分たちがやるべきことはこれだ」とさっそく、参事の山田武甫に相談して、山鹿温泉を改築したいと藩知事に申し出ました。明治三年秋に、藩庁の許可が下り、山鹿温泉大改築に着手しました。明治三年（一八七〇）の秋、藩知事の護久は、山鹿に赴き、直々に津直と甚十郎の家を訪れました。そして、今回の山鹿温泉の大改築は山鹿の住民を幸福にし、健康増進と熊本県や国家の繁栄につながる一大事業であると褒めたたえ、二人を激励しました。さらに護久は、温泉の敷地と、官山の木材や石材をこの事業に与えました。

津直と甚十郎は藩知事の言葉や敷地・資材の提供に深く感銘し、藩札一千貫（今のお金に換算すると二〇〇万円〜六〇〇万円）の大金を改築費として寄付しました。それを聞いた町民も感激し、こぞって応分の資金を提供しました。

甚十郎は山鹿温泉改築の主宰に任命されました。津直は工事の万全を期するために、なったばかりの小属を辞め山鹿に帰り、甚十郎と力を合わせ、朝早くから夜遅くまで、町民を励ましながら大事業に取り組みました。

木材は官山の法華寺山から切り出され、いかだに乗せて岩野川を下り、鍋田橋のところまで陸揚げされて、町民がそれを担ぎ、それが延々と列をなしました。石材も志々岐の涅槃からいかだに乗せられて運ばれました。

山鹿郡内はもろろんのこと、菊池郡や山本郡からも多くの人夫が加勢にきました。また、藩知事の護久も何度も工事現場に出向き、町民たちを激励しました。

土木主任は吉田俊太郎、大工の棟梁は古閑丸三郎、森山弥八、



大改修後の山鹿温泉（明治初期）

森山恒次で、明治維新直後の政情不安の中での官民あげての一大事業でした。

工事は急ピッチで進められ、明治四年（一八七二）一月に上棟式を行い、着工から一年半の歳月を要して、翌年の春、めでたく完成しました。

湧きいだす千代もつきせぬ山の湯は湯の里のみならぬ
国のとみなり

この歌は、藩知事の護久が、山鹿温泉大改築の功績を讃えて詠んだものです。

完成後、町は喜びに沸き、一カ月以上にもわたり祝いの祭りが行われました。藩では二人の功績を賞して、温泉敷地と建物一切を二人に与えようとしたが、二人はこれを辞退し、山鹿町にもらいたいと願い出たので、これが許され山鹿温泉は町有となりました。藩知事は二人にますます感心し、江上家に柔遠堂、井上家に混々堂の称号を贈りました。

当時、山鹿町の戸数は七百戸であったので、「七百戸持ちの温泉」といわれ、町役場には「松岡仁三郎外、七百人持ちの温泉」と記録されました。

大改修により浴場はきちんと区切られ庭園も整備され、清潔となり、男女混浴の習慣も数年後にはなくなりました。

入湯料の有料化と二度目の

山鹿温泉大改築

町民はそれまで入湯料は無料でしたが、建物の修理費、改築費に当てるために明治三十一年（一八九八）から入湯料（一日一回二厘）をとるようになりました。今までは七百戸持ちの温泉とし



桜湯内部（『水絵にのこす山鹿』大代寅次郎画集から）

て町民は無料で自由にはいれたのを、入湯料を取られるということとで、町中に反対の声があがり、ただならぬ情勢となりました。

二人は熱心に町民を説得します。そして、温泉の大功労者の二人を前にして、誰も文句を言う人はいなくなりました。当時、津直は七十一歳、甚十郎は六十六歳でした。

この問題が解決すると、山鹿温泉大改築が再び行われました。伊予の道後湯町（愛媛県松山市）から道後温泉を建設した大工棟梁の坂本又八郎を招いて、設計を依頼し、二階建ての休憩所（松

山鹿町や近郊の殖産興業に尽力



松風館（昭和初期）

風館）と松の湯、紅葉湯、桜湯の整備を行いました。工事は明治三十一年（一八九八）七月に着工し、翌年七月に完成しました。山鹿町では二人のこれまでの功勞を表し、同年二月の町会（町議会）において江上津直・井上甚十郎両氏（本人死亡の場合はその相続人）の山鹿温泉無料入浴の件が会議にかけられ、満場一致で承認されました。

りの改良に尽力しました。津直は、清酒の本場である兵庫県の灘に自ら出向き、その技術を取得して帰り、山鹿の清酒の質を向上させました。山鹿郡村誌によると、明治十二年山鹿町には二十二戸の酒造場があったといえます。

このほか、津直は教育や医学の分野でも力を発揮、特に医学については洋医学を奨励し、元治元年（一八六四）、資金を提供して洋医者を養成するなどして、山鹿町にいち早く病院を開業させました。

甚十郎は、山鹿紙楮会所の役員となり製紙改良に努めました。また、元治元年、宇治（京都府）から講師を招き、山鹿郡多久（山鹿市鹿北町多久）に製茶講習所を設けて、製茶の振興を図りました。そのほか、慶応三年（一八六七）、自宅に大阪より講師を招いて寒天の製造法の普及に尽力、輸出を推進しました。酒造については、明治元年（一八六八）、鍋田の旧紙楮会所跡を買収し、酒造場を設け、講師を灘（兵庫県）などから招き、津直と協同で清酒改良に努力しました。

二人は、近代山鹿温泉の生みの親であつたばかりでなく、山鹿や近隣の地方の産業開発や商工・教育の振興にも貢献しました。

津直は、荒地を切り拓いて、果樹や櫨の木などを植え、産業振興の基礎を作りました。

また、絹織物業では、自ら蚕室を造って蚕を養い、養蚕技術の改良に努めました。製糸業では、長男の定雄を連れて先進地を視察し、研究を重ね、後年には定雄らが製糸会社を設立しました。そのほか、甚十郎と共同で酒造

ちょっとコラム①

投銭箱と温泉の有料化

昭和四十年ころに郷土史家の木村祐章が発見した投銭箱が山鹿市立博物館にあります。これには、「一日一回二厘の入浴料を旅館に泊まった者は宿主に、通行人はこの箱に投銭するように 明治八年八月」と書かれていて、町外の人から入湯料を取っていました。

また、鹿北町多久の高木熊太日記には「明治十八年六月十五日 今日より山鹿町の温泉湯銭をとる。但し一度金二厘宛、明く十六日宇野吉平より嘸す也」と書かれており、投銭ではなく、山鹿町以外の人からはっきり入湯料をとるようになったのは明治十八年からのようです。

山鹿町の人たちが入湯料を払うようになったのは明治三十一年からであり、有料化に対して大きな反対運動が起こりました。しかし、津直、甚十郎が仲裁に入り、これより有料となりました。



年表 History

文政十年 (一八二七)	江上津直、山鹿市にて父が右衛門、母綱子の間生まれる	明治五年 (一八七二)	山鹿温泉が竣工
天保四年 (一八三三)	井上甚十郎、山鹿市山鹿にて父善太郎、母てるの間生まれる	明治九年 (一八七六)	津直、甚十郎、県会議員に当選
幕末	津直・甚十郎は、実学党の横井小楠の塾で学ぶ	明治十二年 (一八八九)	山鹿温泉の湯銭有料化。津直と甚十郎が町民を説得
元治元年 (一八六四)	津直、資金を提供して洋医者を養成	明治二十二年 (一八九九)	二度目の大改築、山鹿温泉が竣工
慶応三年 (一八六七)	甚十郎、製茶講習所を鹿北町多久に設け、製茶振興を図る	明治三十八年 (一九〇五)	津直・甚十郎(二人が死亡した場合はその相続人)の山鹿温泉入浴料無料が町会において満場一致で承認される
明治三年 (一八七〇)	津直・甚十郎は山鹿温泉の大改築に取り掛かる	明治三十九年 (一九〇六)	甚十郎、七十四歳で永眠
明治四年 (一八七一)	甚十郎、旧会所内に学舎を設け、学問を子供たちに教える		

また、津直と同様に、甚十郎は教育の分野にも力を注ぎ、明治四年(一八七二)の権小属に在任中は、児童教育の必要性を説き、旧会所内に学舎を設け、学問を教えました。

津直は何かをやるうとするとき、甚十郎に自分の考えを打ち明け、二人力を合わせて事業に当たりました。津直のなすところに甚十郎あり、甚十郎の背後には常に津直がいました。明治九年(一八七六)、県会議員選挙のときも、二人仲良く当選しました。

津直は晩年、短歌、読書、園芸などにいそしみ、悠々自適の毎を送り、明治三十八年(一九〇五)、七十九歳で没しました。甚十郎は翌年の明治三十九年(一九〇六)、七十四歳で亡くなりました。津直の墓は長源寺に、甚十郎の墓は光願寺にあります。

ちょっとコラム②

温泉番付、山鹿温泉は西前頭五枚目

明治四十二年に作られた「ものしり天狗番付百種」(大阪・岡本増進堂)に温泉番付があります。

それによると山鹿温泉は西前頭五枚目にあげられています。熱海・箱根・伊香保が行司で、熊野の本宮・新宮が勸進元です。西の大関は有馬、関脇は城崎、小結は道後、前頭は山中・雲仙・阿蘇・霧島、そして、山鹿の順となっています。別府は十九枚目、桜島は二十枚目、武雄は三十三枚目、日奈久は三十四枚目、県内の温泉はほかには出ていません。

近代の山鹿の偉人たち 020
私財を投じ山鹿温泉を大改築、殖産興業の先駆け
江上 津直・井上 甚十郎

平成 24 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課
〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿 156-3
TEL 0968-43-1691

執筆
井上 欣也

参考文献

- 『山鹿市史』上・下(山鹿市) 『新補山鹿市史』(山鹿市)
- 『熊本県大百科事典』(熊本日日新聞社) 『肥後商工先達伝』(熊本県立商業高等学校)
- 『湯の町山鹿』第一輯(山鹿郷土史研究会) 『水絵にのこす山鹿』(熊本日日新聞社)
- 『広報やまが 210・925・927・930号』(山鹿市)